

デイスカバリー？

内藤 真理子

「デイスカバリー傑作編」というテレビ番組がある。何を発見するのだろうと、興味津々でチャンネルを合わせた。すると「クラシックカーディーラーズという言葉が画面に踊る。」

車の番組？ どうもそうらしい。

「今回は、イギリス車の、ランドローバー・ディフェンダーV8ガソリンエンジンの80年代モデルの中古車をネットで探します」とテレビ画面が言っている。ランドローバーなら私だって知っている。やっぱり車の番組だ、と腰を据えた。

登場するのはディーラーのマイクと、エンジニアのエド。

マイクは目当ての車をネットで検索して、安くて状態の良い車を探し、実際に出向いて実物を見て買って来る。ただ買うのではなく、中古車なので傷んでいるのは当たり前、エンジンやボディー内装などを入念にチェックして、それに応じて値下げ交渉をして 手に入れた。

それを、エンジニアのエドの待つ修理工場までドライブをしながら運ぶのだが、移動に八時間もかかった、楽ではない。

エドに見せる。彼の気に入りの車だ。二十年以上も前の車で、おしゃれでもスマートでもない。だがノスタルジックで、エンジンの唸るような体感がしびれると言ってノリノリだ。

「この車の内装も外装も直してモダンな色に塗り替え、都会でも乗れるようなお洒落なものにしないと、高くは売れない」。これが二人の一致した意見だった。

それからエドの活躍が始まる。車体が高くてダサイので低くする。長年使っている部品の摩耗したものを取り替えたり、丁寧に掃除したりするのだが、エドは、その動作をしながら、素人の私にでもわかるように、手順や注意事項を説明してくれる。ただ見ているだけなのに、私はその油まみれの作業が楽しくて仕方がない。車の倉庫の様な古くさい後部座席の壁をカットして窓を作った。

色をシルバーに塗装して出来上がってみると新品同様。どんなお洒落な街を走っても見劣りはしないだろう。私にとってはこの番組が、デイスカバリーだった？